# 雪の日

北川 千代

その頃私たちは、父の勤め先のある田舎に暮らしていました。七人の兄妹の中、上二人の兄たちは、東京のほうに残され、下の二人はまだ小さかったので、二つ年下の弟の隆と、その下の妹の与志子と、私との三人が、工場からは小一里も隔たった町の小学校へ通っていたのです。

私たちのお父さんは、ふだんはずいぶん優しく子供には目のないかたでしたが、学校のことになると、まるで人が違ったように厳しくって、その、一里も先の小学校へ行くのに、雨が降ろうが風が吹こうが、一日として休めと言ってくれたことがなく、また、人力車になども乗せようとはしてくれなかったのでした。

「丈夫な子供が、歩いて学校へ行けないなんて恥ずかしいことだ。」

けれど――秩父おろしの吹きおろしてくる寒い冬の朝など、東京に住み慣れた私たちの耳は、風と一緒に吹き飛んでしまうかと思われるくらいなのでした。

私は今、こうしているうちにも、広々と吹きさらす田んぼ道を、木枯らしに吹き飛ばされるようにコトコトと歩いていく、小さい私たちの姿を思い浮かべます。本当にその頃の私たち――ことに、まだようやくその年の春一年生になったばかりの与志子などは、一吹きの風にも飛ばされてしまいそうな小さい子供でありました。

3 【一里】距離の単位。一里は約四キロメートル。小一里の場合は、一里より少し短い距離。

9 【秩父おろし】秩父地方で冬に山から吹きおろす風。秩父は、埼玉県南西部の地名。

どんよりと昨日から曇っていた空が、夜明けから雪を落としてきた、ある朝のことでした。

「大したこともあるまいと思うけれど、風があって寒いから、今朝だけは汽車に乗せていっておもらい――。」

私たちは母にそう言われたので、大喜びでかばんを背負うと、庭先へとび出しました。汽車――というのは毎日朝と晩との二回ずつ、町と工場との間を往復する会社専用の貨物列車のことなのです。私たちは毎朝、学校へ行くときに、私たちの後ろから工場を出て、じきに私たちを追い越して先に見えなくなっていく汽車を、どんなに羨ましく思っていたことだったでしょう。

「あの汽車に乗せていってもらえたら、ずいぶん楽なんだけれどもなあ。」

そう思っていたその汽車に、今朝は乗せてもらえとお母さんが言うのですから、私たちが大喜びしたのも無理はありませんでしょう。

それで私たちは、貨車の車掌さんに頼んでもらうため、女中に毛布を持ってもらって、家を出ようとしたのです。

門口で、事務所からなにかの用事で帰ってきた父にばったり会いました。

「どこへ行くのか。」

と、父が聞きました。

「あの、奥さまが嬢ちゃんたちを汽車に乗せてもらうように、頼んでこいとおっしゃいますので――。」

女中の言いかける言葉を、お父さんが遮りました。

「いけない――うちの子供たちを乗せたらば、みんな他の子供たちも乗せなければならない。あの汽車はみんな乗せるほど、そんなに空いてはいないのだ――。道代も隆も歩いていきなさい。

13 【門口】家の出入り口。

これくらいの雪、丈夫な子供が歩けないなんてことがあるものか。――それにどこの子も、みんな歩いて出かけたのだ。」

私はそのときほど、お父さんを憎らしく思ったことはありません。私たちは今までの喜びのてっぺんから、まっ逆さまに突き落とされたのです。私は、泣きそうになっている小さい与志子の手を握って、意地悪くくるりと向きを変えて黙って歩きだしました。弟の隆も続いて歩きだしました。

「おいみんな、行ってまいりますと言わないのかい。」

父の声が後ろから言いました。

「行ってまいります。お父さん。」

振り向いて、立ち止まって、隆と与志子とは素直に挨拶しました。けれど、私はわざと返事もしないで、平気でぐんぐん妹の手を引っぱりました。

「誰が、お父さんなんかに――行ってまいりますなんて言うものか。」

一里の道が今日ほど遠く、今日ほどつらく思えたことはありませんでした。そしてその遠い道を、私はひと言も口をきかずに黙って歩いていったのです。

「私たちが雪に埋まって死んでしまったら、お父さんは泣くといい。」

――しかし、おかしいことに、その面当てをするのには、あまりに積もっていない浅い雪でありました。

学校にいるうちも、雪は少しの休みもなく降り続いて、教室の硝子窓の外は、チラチラ動く白い色で曇ったきり晴れませんでした。

「この雪の中を、また歩いて帰るのか。」

そう思うと私は、またしてもお父さんを憎らしがらないではいられませんでした。

「みんなよその子にはお迎えが来ている――だのに――いちばん遠いのに――。」

最後の時間の終わる頃、小使いさんが教室に入ってきました。そして先生になにかささやくと、またそっと出ていきました。（一年生の与志子は姉さんの私を待つために、寒いので今日は私の机のそばに、並んでチョコンと腰掛けて、みんなの授業を見ておりました。）

やがて授業時間が終わったとき、先生は私たちのほうを見て言いました。

「うちから人力車が迎えにきているよ。」

あ！　と叫びたいほどの意外さでありました。私は叫びたい声を飲んだまま、思わず与志子のほうを振り向きました。そのときの与志子の小さい顔の、どんなにか子供らしいうれしさに輝いていましたことか――おお、与志子はこんなにも喜んでいるのです。本当に小さい与志子にとって、この雪の一里の道は、どんなに遠く悲しい道であったかしれないのです。だのに――私は――。

私は妹のような素直な心で、父のはからいを喜びはしなかったのです。

「お父さんはとうとう、自分の説をまげてしまったではないか、そしてとうとう人力車なんかよこしたではないか。お父さんは今朝のことで、きっと私たちに気の毒をしたと思っているのだ――。」

なんとなく今朝のしかえしをしたような、やや痛快な気持ちでした。

それだけではない。私はそこまで折れてきた父の心を知ると、なお、もっと意地悪くなったものです。

「お父さんは今朝あんなにも言ったくせに――今頃人力車をよこしたって、誰が乗って帰るもの

3 【小使いさん】用務員の古い言い方。

か。」

――

門の前には一台の人力車が待っていました。人力車屋さんは私たちの姿を見ると、幌を開いて言いました。

「お嬢さんたちだけ乗ってお帰りなさいましとおっしゃいました。坊ちゃんは男だから……。」

言いかけようとする言葉を、みんなまで聞かずに私はつっぱねたのでした。

「男だって女だって寒いことは同じだわ。――私、乗らないで歩いて帰る――今朝お父さんは、雪くらいに歩けないことはないとおっしゃったんだもの――私たちだけ乗せて、他の子を乗せないなんてことはできないって、ちゃんとそうおっしゃったんだもの。」

「でも――。」

と、人力車屋さんは困ったように言いました。

「せっかくお迎えにきたんですから。」

「いや。私たちは歩いて帰る――お父さんが今朝おっしゃったんだから――。」

私は与志子の顔に湧いているであろう失望の色を、わざと知らないふりをして、ぐんぐん先に立って歩きだしました。けれど、与志子は今朝のように、すぐ私についてはきませんでした。かわいそうに、与志子は、行く手をすっかり閉ざしている雪の幕におびえたように、心残りらしく人力車のほうを振り返って、歩きだししぶっているのです。その与志子の様子を見て、人力車屋さんがもう一度言いました。

「では、小さい嬢ちゃんだけでも乗っておいでになりませんか。」

与志子は私の顔を見ながら立ち止まりました。つむじ曲がりの意地っぱりの姉さんさえいな

3【幌】雨や風、日の光を防ぐために、車の上に張る布の覆い。



かったら――いえ、明日もまた学校へ連れてきてもらうことさえなかったら――すぐにも飛んでいって幌の中に入りたかったのにちがいありません。しかし、その与志子の気持ちを私は知ると、まるで彼女が自分を裏切りでもしたような憤りを感じたのです。

「よっちゃん、乗りたければ一人で乗っておいで、みんなが歩いて帰るのに、あなただけ乗っていいつもりなら乗っていくといい。」

いくら小さい与志子でも、姉の言葉の針を知らないはずはなかったのです。与志子はかぶりを振って、黙って私について歩きだしました。私は勝ち誇ったように、妹に言ったものです。

「そうよ。みんな他の子が歩くのに、私たちばかり人力車で帰るのは悪いことよ。」

けれど、私の心のうちに、本当にそういう気持ちがあったでしょうか。私がそういう言葉を繰り返したのは、ただお父さんに対する意地だけだったのです。それに私は妹に人力車に乗って帰られることがいやだったのです。なぜ――それは自分も乗りたくってたまらないものだったからです。

吹雪の道を、私は妹の手を握り、弟と肩を寄せて歩いていきました。風の横殴りにくるたびに、目の開けられなくなる私たちは、立ち止まってはまた歩きだしました。人力車屋さんは道の中程まで、私たちについて、しきりに乗ることを勧めていましたが、やがて根気が尽きたようにだんだん足を速めて、いつか雪の向こうに見えなくなってしまったのです。人力車屋さんの姿が見えなくなると、与志子はしくしく泣きだしました。

かわいそうに――妹は、いつか姉さんの心が折れて、自分に人力車に乗れと言ってくれはしないか――と、心頼みにしていたのです。私は与志子のいじらしい心持ちを察しると、小さな肩を抱きしめて謝りたい気持ちでいっぱいでした。けれど私はその気持ちを、心とはまるで反対な

19【察しる】察する。

言葉で言い表したのでありました。
「そんなに泣くほど乗りたければ、一人でさっさと乗っていけばいいのに――本当に、いやな人よ。」
あとはだんまりこくって歩いていくばかりでした。
家に着いたときには、もう外は薄暗く、室内にはあかりが光っていました。人力車屋さんの報告が先に行っていたとみえて、私たちが玄関を入るとすぐ、お母さんが駆けだしてきました。
「まあ、なぜ人力車に乗ってこなかったの、あれはお父さんが、せっかくおやりになったんだのに――自分が乗りたくなかったら、せめて与志子だけでも、乗せて帰すがよかったではないか。かわいそうに、こんな小さい者を歩かせて――。」
与志子が急に、ワッと声をあげて泣きだしました。
「ほんとに姉さんらしくもない強情よ。」
と、お母さんは与志子の髪をなでながら続けました。
「お父さんは今朝、あんなにしておまえたちを出しておやりになったのが、あとでかわいそうにおなりになったればこそ、ご自分が負けて人力車をおやりになったんだのに、そのお気持ちを踏みつぶしてしまうなんて……。」
私はお母さんの言葉を黙って聞いていました。何と言われてもしかたのないことでした。
「お父さんのお気持ちを踏みつぶしてしまった。」
――それは自分が、しようとしてしたことではありながら、今、お母さんの言葉で聞かされると、たまらない悲しい気持ちでした。私が黙っているのを見ると、お母さんは今度は優しく言いました。

「お風呂が沸いているからすぐに与志子と入っておいで。――帰ってきたら風呂に入れるように、沸かしておいてやれと、お父さんがわざわざ事務所から電話をかけておよこしになったんですよ。」
私はその言葉を胸に痛く聞きながら、与志子と二人して湯殿へ入っていったのでした。
与志子は暖かい湯気に包まれると、もうさっき雪の中でのできごとはすっかり忘れてしまったように、明るい無邪気な顔を石鹸の泡の中で笑わせていました。でも私の心は、そうたやすく和らぎませんでした。自分の意地を十分に通してしまったあとにわくいつもの寂しさ――でした。
湯殿の硝子戸が、いきなりガラリと開きました。
事務所から帰ってきたお父さんでありました。
「みい助もよし兵エも（これは父の機嫌のいいときに呼ぶ私たちの愛称です）帰ったね。おまえたちなぜ人力車に乗ってこなかったのだい。母さんがずいぶん心配していたぞ――でも今日は全くお父さんがまいった。ふだんお父さんがあんなに言っていたのだからなあ――おまえたちだけ人力車に乗せようなんて、これはお父さんが悪かった。」
私はお父さんの言葉を聞いているうちに、自分の胸を埋めている固い意地の、みるみる砕けていくのを感じました。お父さんは私の、お父さんに盾突いている意地っぱりな心を、大変いい意味に解釈して、自分をとがめていらっしゃるのです。そんなにもお父さんは、私を信じていらっしゃるのです。このお父さんの信用と愛情とが、私の心を激しく打ちました。私は目のうちに、急に突き上げてくる熱いものを感じました。けれど、私はお父さんにそれを見られるのが恥ずかしかったので、いきなりジャブジャブと手拭いを桶に浸して、顔を洗ったのでありました。

4 【湯殿】浴室。

〈出典『少年小説大系 第二五巻 少女小説名作集（二）』（三一書房、一九九三年）〉

【著者】北川 千代（きたがわ ちよ）
一八九四（明治二七）年―一九六五（昭和四〇）年
児童文学作家。埼玉県の生まれ。
【著書】「絹糸（きぬいと）の草履（ぞうり）」「母の幻（まぼろし）」「子供と太陽」など